

聴覚保護具

購入ガイド



はじめに

この購入ガイドでは、大手メーカー 3M の協力によりデザイン・生産された RS が取り扱っている聴覚保護具についてご紹介します。聴覚保護具を選択する上で重要なポイントを取り上げ、各種聴覚保護具を詳しく説明するとともに、さまざまな保護具を適切に装着する方法や関連する EN 規格の概要を説明します。RS では世界中のエンジニアの方が利用されているメーカーの聴覚保護製品を幅広くご用意しています。また RS ではこれら全てのラインアップを魅力的な価格で提供するとともに、国内在庫品に関しては、ご注文の翌日にお届けします。なお、大口注文の場合にはディスカウントも承っています。

聴覚保護の必要な状況

次の場合に、従業員の聴覚保護を行う必要があります。

- 対策済の範疇を越え、想定以上の騒音が発生している場合
- 新たな騒音対策が施工されるまでの間

RS での購入をおすすめする理由

RS は業界のエキスパートとして、あらゆる条件や環境に対応する聴覚保護具を提供しています。プロも認める RS ブランド品から、グローバルでマーケットをリードする 3M の商品まで、さまざまな商品をご用意しています。RS なら必要な条件を満たす製品がきっと見つかります。また、国内在庫品なら翌日お届け。大口注文の際にはディスカウントも承っています。

聴覚の保護が必要な状況とその理由について

2005 年の職場の騒音に関する規則に基づき、騒音が 80dB(A) を超える環境では、作業員は適切な聴覚保護具を着用している必要があります。すべての EU 加盟国は、2006 年 2 月時点で、この指令への適合を図っています。人が何も防護をしない状態で 80dB(A) を超える騒音にさらされ続けると、聴覚に永続的な障害を及ぼす可能性があります。そのため管理側は作業環境や状況を考慮する必要があります。さらに、職場での騒音はコミュニケーションの妨げとなり、警告が伝わりにくく、安全上の問題が生じます。

重要な注意事項

聴覚保護具は、騒音を管理する代替手段としては使用できません。雇用主は、職場の騒音による健康や安全へのリスクを排除又は軽減する義務があります。

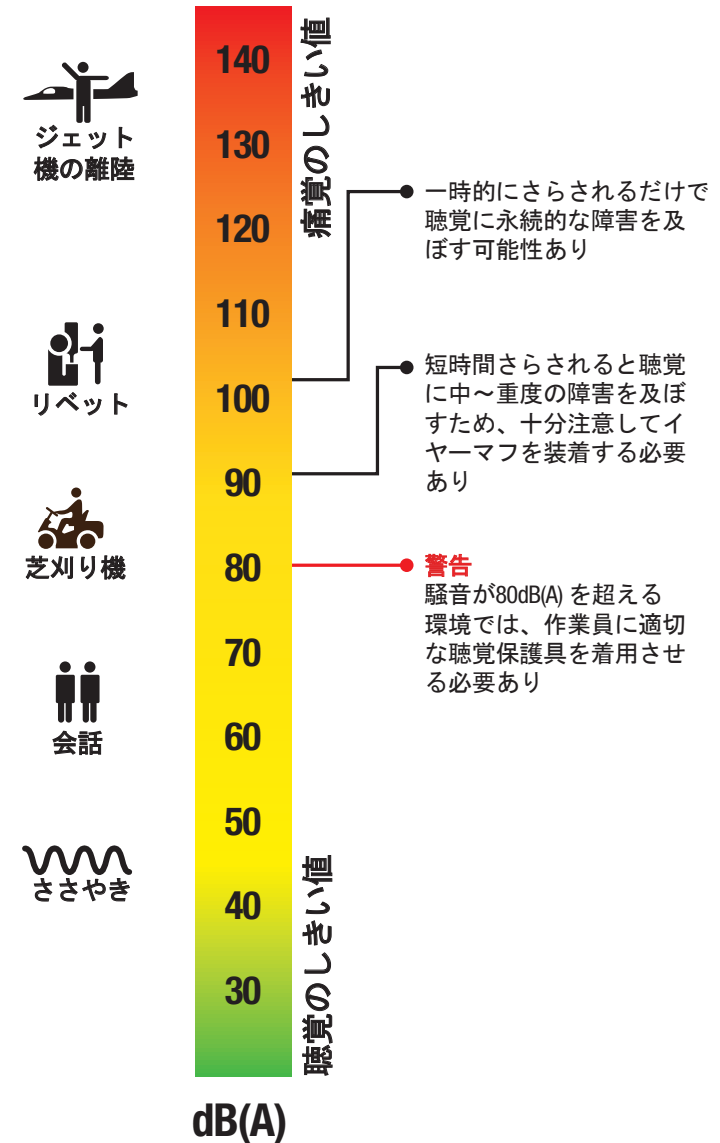
次のいずれかに該当する場合は、対処策とリスク評価を図る必要があります。

- 作業時間の大半、騒音に悩まされる（例：掃除機や騒がしい道路）
- 少なくとも 1 日のうちの一定時間、2 メートル離れた人と会話をするのに声を大きくする必要がある
- 1 日に 30 分以上、電動工具や機械を操作する
- 騒音が伴う業種である（例：製造・建設・エンジニアリング・道路作業・エンターテイメント）
- 衝撃による騒音が発生する（例：ハンマーや油圧工具の使用）
- 爆発による騒音が発生する（例：起爆装置）

従業員の聴覚保護を実施する際は、必ず、先に次のような騒音を最小に抑えるための騒音対策を取る必要があります。

- 騒音の少ない機器やプロセスを用いる
- 騒音源の音を小さくする技術変更を行う
- スクリーン・防壁・カバー・吸音材を使用する
- 騒音のあるエリアに従業員がとどまる時間を制限する

損傷しやすい聴覚を手軽に保護



保護具の選定ガイド

1 聴覚保護具を選ぶときに考慮すべき点

聴覚保護具を選ぶときは、次の点を考慮する必要があります。

- 作業に適した保護具の種類
- ヘルメット・アイプロテクター・マスクなど聴覚保護具と合わせて使用する必要のあるその他の安全保安用品
- 騒音を減衰する手段（騒音の軽減）
- 騒音の放出パターン
- ちりやほこり、熱や湿度などの環境要因
- メンテナンス及び交換コスト
- 使い心地と使用者の好み
- 使用者の健康状態

騒音の測定方法

騒音は、デシベル (dB) の単位で測定されます。「A 特性」は「dB(A)」と表され、平均的な騒音レベルを測るのに用いられます。「C 特性」は「dB(C)」とされ、ピーク時、衝撃又は爆発による騒音の測定に用いられます。人間の耳は、3dB の騒音レベルの変化にも気付く構造となっています。レベルが 3dB 上がるごとに騒音は倍になるので、数字の小さな違いに見えても、影響が非常に大きくなる可能性があります。

防護係数の指標

A 特性の騒音レベル (dB)	選択する保護具の SNR
80 ~ 90	20 以下
90 ~ 95	20 ~ 30
95 ~ 100	25 ~ 35
100 ~ 105	30 以上

2 騒音の検出

従業員がさらされる騒音を最小限に抑えるため、職場での騒音レベルを測定、監視する必要があります。RS では、聴覚保護商品に加えて、さまざまな騒音測定器を用意しています。これを用いることで、必要な保護レベルを確認し、商品の選定に役立てることができます。

3 聴覚保護具の種類

使い捨て耳栓

一般的に、膨らんでゆっくり復元する性質の素材を使用しており、保護機能とともに快適な装着感が得られます。耳に入れたフォームプラグが膨らむことで、確実かつ快適に装着できます。この種類の耳栓は通常、一度使用したら破棄します。耳栓は別個又はひも付きで 1 組のものが 있습니다。

再使用可能耳栓

再使用可能耳栓は、プレモールド型の耳栓とも呼ばれ、耳にフィットするように形成され柔軟な素材でできています。通常は紛失防止用のひも付きで、衛生的かつ経済的で、快適に装着できます。サイズの調整は不要です。金属検知型のものもあります。

バンド付き耳栓

使いやすく便利で、とても快適に装着できます。装着と取外しが容易で、不要なときに首にかけることができ、断続的に使用する場合に最適です。

イヤーマフ

イヤーマフは、硬いカップと柔らかいプラスチッククッションで構成された聴覚保護具で、耳の周りを密閉して騒音を軽減します。使いやすく、使い心地もいいので、よく選ばれています。ヘッドバンド・ネックバンド・ヘルメット装着型・折りたたみ式のものがあり、ほとんどの用途でのニーズに対応します。



通信イヤーマフ

通信イヤーマフには 2 種類あります。聞き取りのみのイヤーマフにはシェルにあるボタンを押すことで減衰レベルを小さくする機能が付き、イヤーマフを装着したまま人の話を聞くことができます。会話及び聞き取りができるイヤーマフには無線機が内蔵されており、同じ周波数の他のヘッドセットや双方向無線により、ケーブルなしで短距離の通信が可能です。

聴覚保護具用ディスペンサ / アクセサリー

RS では、付加的な聴覚保護やメンテナンスのニーズに対応するため、イヤーマフをメンテナンスする衛生キット・必要な場所で耳栓を供給するためのディスペンサ・イヤーマフ専用の保管ボックスなど、さまざまな関連商品アクセサリーをご用意しています。



聴覚保護具の使い方とお手入れの仕方

使い方

お手入れとクリーニング方法

使い捨て 耳栓



フォーム製の耳栓をゆっくり回して圧縮し、細い円筒状にします。圧縮した耳栓を外耳道に差し込みます。差し込むときに、耳を上の外側に引っ張ると簡単に装着できます。

耳栓は清潔にして、外耳道の炎症の原因となるものが付くことのないようにしてください。中性洗剤と温水で洗浄できる耳栓もあります。余分な水を絞り落として乾燥させてください。洗浄は何度か繰り返すことができます。耳栓が著しく変形した場合、元のサイズや形に戻らなくなった場合は、破棄してください。



再使用可能 耳栓



頭の後に手をまわして耳を外側に引っ張りながら、密閉された感覚を覚えるまで、耳栓を差し込みます。特に耳栓を使ったことがない場合は、最初きつく感じる場合があります。

プレモールド型の耳栓は、種類や作業環境・衛生状態・身体の反応に応じて、数ヶ月間の使用が可能です。縮んだり硬くなったりした時や、裂け目や割れ目が出てきた時、完全に変形した時は交換してください。洗浄には、温かい石鹸水を使い、十分にすすいでください。乾燥したら、キャリーケースに入れて保管します。



バンド付き 耳栓



ポッドの大きなところを持って取り回し、チップを外耳孔に向けます。ポッドを外耳孔にしっかりと押し込み、安定した密閉感が得られるまで小刻みに動かします。ポッドを押すときに耳たぶを引っ張ると、装着しやすくなります。

バンド付き耳栓はほとんどの場合に、再使用可能耳栓と同じ方法でクリーニングできます。バンドでチップを保持して密閉しているので、変形することのないようにしてください。変形すると、器具の保護能力が低下する場合があります。



イヤーマフ



イヤーマフは、耳を完全に覆って頭部に密着させる必要があります。最適な効果が得られるよう、耳のまわりに均一に圧力がかかるようにヘッドバンドを調整します。髪を後ろに引いて、クッションの下に入らないようにします。帽子をかぶったり、耳に鉛筆を挟んだりするなど、密閉の妨げになるものを装着しないでください。

クッションをクリーニングするには、温かい石鹸水で洗浄し、十分にすすぎます。アルコールや溶剤は使用しないでください。クッションは、少なくとも年に2回以上取り替える必要があります。硬くなった場合やひび割れがある場合、密閉性がなくなった場合は必ず交換してください。イヤーマフは絶対に改造しないでください。特にヘッドバンドを伸ばしたり、誤用したりすると、保護能力が低下します。

